

## ■ 書 評

マクヒュー／スラヴニー  
現代精神医学

ポール・マクヒュー，  
フィリップ・スラヴニー 著  
澤 明 監訳  
みすず書房  
2019年6月 440頁  
本体価格 7,200+税

本書は、米国の精神医学教育を牽引する Johns Hopkins 大学精神科にて、長年、臨床指導の任にあたってきた2名の教授が著したものである。うち、McHugh 教授は、1975年より26年間も精神医学・行動科学部門の主任教授を務めた斯界の重鎮の1人である。また、ジョージ・W・ブッシュ政権時代の生命倫理に関する大統領諮問委員会やカトリック教会聖職者による性的虐待スキャンダルの調査委員会などにも名を連ね、世相におもねらない保守派の論客として一般にもよく知られてきた。監訳者によれば、本書（1998年改訂版の邦訳であり、原書の初版は1983年）は、「精神障害・病気をどのように把握し、考えるかを説明した教科書」であるというが、単に精神疾患の病因、症状、診断、治療などを系統的に羅列しただけの凡百の教科書の類とは全く異なる。事実、本書の主題について、著者らは「病気の概念とその基本的な区別について、DSM-IIIとDSM-IVを超えた次元で論じていきたい」と述べている（単なるDSM批判ではない）。いわば精神疾患の概念的・構造的問題に真正面から取り組んだ精神病理学総論——最近では、「精神医学の哲学（philosophy of psychiatry）」と呼ばれる分野——の大著であり、わかりやすくいうとメタ精神医学の試みである。その意味では、きわめて革新的な教科書であり、初版より40年近くを経た現在でも少しも古くはならない。いやむしろ、後述するように、今こそ読まれるべき意義がさらに高まっているように思われる。

本書は、第I部において精神科の初学者が直面する困難として、心脳問題と精神医学の発展を阻害している派閥争い（近代精神医学、現象学、精神分析学、および反精神医学などの反目）を挙げ、それらを超克するために4つの観点（perspectives）による精神障害の説明モデルを提言する。その4つとは、疾患、特

質、行動、および生活史の各観点であり、続く第II～V部にて詳述される。例えば、疾患の観点については、「精神症状が疾患により生じていると説明できる」器質的疾患と「疾患の概念は適切であると考えられるが、背景に存在する病理や病因が明らかにされていないため、単に臨床症候群として表される」機能性精神病を挙げる。一方、特質（原語は、“dimensions”）の観点では心理学的知見に基づき知的障害やパーソナリティ障害の概念を説明する。こうまとめると簡単そうに見えるが、実のところ、各観点の背景の記述は、一般医学から心理学、社会学、歴史学に及ぶ著者らの博覧強記に裏打ちされたまことに膨大なもので、評者は圧倒される思いで読んだ。

最後に4つの観点の適用について、臨床的問題を捉えてゆくうえで組み合わせる使用（いわゆるケース・フォーミュレーションへの応用）は可能であるが、それぞれの観点は異なった考え方を背景に立っていることに留意すべきであると念を押す。なぜなら、すべての精神科患者や障害に適用できる統一場理論や究極の生物学的還元論、あるいは精神分析学のような基本的心理学理論は存在しないからであるという。確かに、今日の精神疾患研究の現状は、それを支持しているようだ。

こうした著者らの「観点」主義の提言から出発し、DSM-5策定の思想的リーダーを務めたKendlerは、21世紀に入って、科学哲学者のMitchellやZachar、わが国でも村井俊哉の邦訳により知られるGhaemiらの言説を参考にして、説明的多元主義（explanatory pluralism）を提唱し、それが生物学的還元主義よりも精神疾患の説明モデルとして適切であると主張した（Am J Psychiatry, 162: 433-440, 2005）。こうした昨今の北米における多元主義の台頭は、MeyerからEngelに至る彼らの精神医学の伝統に沿うものであろうし、本書は、その輝かしいマイルストーンである。興味深いことに、Jaspersもまた多元主義の説明モデルの先駆者として扱われている。評者は、内村祐之の『精神医学の基本問題』（1972）とは似て非なるように思った。その意味でも、わが国の伝統的な精神医学に対する挑戦的啓示に満ちた本書が広く読まれることを期待したい。

（黒木俊秀）